No. 16
1989. 12

図書館だより

上田女子短期大学附属図書館

文　庫　遍　歴

矢　羽　勝　幸

私が和本、特に古俳書に関心を持つようになったのは、大学1年の夏頃であったように記憶する。その年の夏、伊那市周辺の文学碑探訪をかねて同市山寺の福沢武一先生（本学講師）をお訪ねした。先生のお宅を根城にして附近に散在する野口在色の墓碑とか、横井也有筆の芭蕉句碑などを拓本にとってまわった。およそ一週間ほどもお邪魔したのだから先生や御家族もずいぶん迷惑であったに違いない。そんな折、先生から数冊の和本を示された。たしか、中村伯先の追善集『明月集』や文化3年麻績村から出版された『こけのつゆ』なども含まれていたと思う。特に後者については、この出版の契機となった猿ケ馬場峠の芭蕉句碑を一見、採拓していたから当時の原本を手にできたのは感激であった。その感動はおおげさにいえば時を超えてなお存在し続けているものへの驚きといってもよいかもしれない。原本にあたることによって碑が建てられるにいたった経緯や時代の雰囲気といったものがよくわかった。

文学碑などによって当時ひととおりの草体文字に通じていた私はしだいに江戸時代の書籍に入りこんでいく。上田市立図書館にある花月文庫、長野県立図書館の関口文庫には足しげく通った。花月文庫の俳書はそう多くはないので旬日をへずほとんど読破し、必要なデータはすべてノートに収めた。関口文庫は特に信州の古俳書を中心とした文庫で、大いに勉強になった。旧蔵者関口彦一郎翁が手ずから透き写された写本が多く、愛書家の執念といったものを知った。コピー機といった簡便なもののない時代のこと、私もせっせとエンピツで写本を作った。今日、それらのノート類を開くと、判読できないまま原本通りに写した草体文字が目につくが、若き日の自分の中にあった情熱といったものに思いを新たにする。

目　次

- 文庫遍歴 ……矢羽　勝幸… 1
- 疲れと酒がみせてくれた夢の話 ……関口　信雄… 4
- 墨の話 ……周東　清芳… 6
- 「本」のすすめ ── 私の読書── ……荻原　和夫… 8
- オーストラリア芸術鑑賞旅行 ……大塚あゆみ…10
- 秋の日のこと ……臼田　敦美… 11
- 幼稚園 ……山田　恵子… 12
- 童話の世界から ……佐藤　陽子… 13
- 児童文化研究大会に参加して …深沢あゆみ… 14
- 【図書館ガイド】 …… 15

当時加舎白雄とその周辺に研究のテーマをしぼっていた私は、白雄の著作をもとめて全国の特殊文庫を巡った。面影橋（早稲田）の下宿からほど近い松宇文庫へは授業のない日は毎週のように通った。この文庫は、丸子町出身の俳人で俳諧研究にも造詣の深かった伊藤松宇の旧蔵古俳書を収蔵していた。文庫といっても広く一般に公開していたわけではなく、特別に紹介状でも持参した者のみに、ポツポツ見せていた程度であった。私は早稲田大学の中村俊定先生の紹介で訪れた。先生は昭和8年頃、松宇翁と親しくなられ、高木蒼梧氏、荻野清氏などとともに目録、解題作業を委嘱されていた様子であった。私が訪れた当時は所蔵者の野間家（講談社社長）の執事をしていた大内進老が文庫の担当でまだ十分に目録も完備していなかった。大内老はすでに齢八十をいくつか超えていたが、度々訪れる口数の少ないモノ好きそうな青年に好意を感じた様子でいろいろと親切にしてくれた。この人は講談社草創期の一人で初代社長野間清治の秘書をしていたという。同僚に俳人で、かの名著『江戸から東京へ』で知られる矢田挿雲がおり、その縁から俳句を知り挿雲の主宰誌「千鳥」に参加されていた。私もこの人の紹介で当時「千鳥」誌に雑文を書いたりした。

松宇文庫は再度の火災にあって、水ぬれ、蒸し焼きにされ、すでに書物の体裁をなしていないものが多かった。ページをめくるたびに茶色に灰化した紙がパラパラとかけ落ち、みるも無残であった。カメラなど買えない貧乏学生の私は、ここで白雄の撰集『春秋稿』の何篇かを数十日を費して筆写した。事務室からは時々大内老が様子をみにきて、いっしょに庭を散歩したりなどした。松宇翁が晩年を過したこの庵は、東京都の史蹟に指定される関口芭蕉庵でもある。史蹟指定のかげに翁の都への熱心な働きかけがあったわけだが、隣は山県有朋の別荘として知られる椿山荘（現在婚結式場）である。広い邸内を散策していると、東京にもこんな田舎があったのかと思うほどの閑静な場所であった。松宇翁は晩年、この邸内に『俳諧七部集』に出てくる植物を片はしから移し植えていた。戦災によってそれらの植物は跡をとどめず、松宇旧宅の芭蕉庵もまた往時のおもかげはない。

大内進老との交際は、私が信州へ帰ってからもしばらく続き、娘の誕生祝いに祝句を認めた短冊などを送ってもらったりしたが、いつしか年賀状も来なくなった。昭和60年、国文学研究資料館が中心となって、現在音羽の講談社本社に移されている松宇文庫のマイクロ化、目録化が行われることになり、何十年ぶりかにボロボロのなつかしい本に再会した。その折、談たまたま大内老のことに及び、すでに十余年前、故人になられたことを知った。墓は早稲田大学近くの某寺にあり、調査主任の雲英末雄氏はつい先日香を手向けられたとのことであった。私は多忙にまぎれていまだ墓前にぬかづくこともしないでいるが、いつの日か果たしたいと思っている。ちなみに松宇文庫は、昭和60、61年とカードとり、マイクロ撮影が行われ、60年度の撮影分はすでに紙焼き整本され、本年度から国文学研究資料館で自由に閲覧されている。開架式のため一度に何冊でも閲覧することができる。マイクロフィルムから直接紙焼きすることも可能である。今年の夏、館を訪れこれらの便利な姿をみて、20余年以前の自分の労苦をふりかえった。全国の貴重書は着々とマイクロ化され、館に収蔵、自由に閲覧されている。私のように田舎に住んでいる者は何ともうらやましいかぎりである。これで勉強ができないという東京の研究者がいたら、それこそ笑い種である。

昭和44年、私は郷里に帰って高校の教師になった。翌年から宮脇昌三氏、田子檀氏と加舎白雄研究会を創り、全集の発刊をもくろんだ。資料蒐集は私の担当で、毎夏のように奈良の天理図書館へ通った。この図書館には人も知る綿屋文庫がある。戦前「古俳書の殿堂」と呼ばれたのは、さきの松宇文庫やすでに東大総台図書館に入った酒竹文庫、竹冷文庫、斎藤雀志の文庫などであったが、今日となっては、いずれも綿屋文庫にはかなわない。戦前の研究者勝峯晋風や川西和露などが精魂こめて蒐めた貴重書まで

皆この文庫に収められたのだ。私が足繁く通った頃は、申請すれば一日に何十冊でも閲覧できた。おおかたの俳書には、自分のもとめる人の作品は、大体1句しか載っていないからなるべく多くの俳書に当りたい。ばく大な旅費と宿泊費をかけてはるばる天理市まで行って一日4、5句しか拾えないのはかなしい。十余年前から閲覧制限ができ、しかも私の行ける夏休みは特に午前中しか閲覧させない。9時開館を待って急いでとび込み、本を注文する。40分ぐらい待たないと本は出てこない。閉館の12時まで正味2時間少々しか見れないのである。あらかじめエンピツを20本ほど、削っておき、来るやいなやどんどん写していく。まさに死にもの狂いといったところ。

初めて綿屋文庫に行った時は、宮脇昌三氏の紹介で天理教の教会を宿舎にした。私は信者ではないから朝夕のおつとめには出ないが、朝食は一般の信者とともに教会の食堂でとった。その質素なことはいまも忘れられないが信仰ということ、修行ということを改めて考えさせられた。

一週間ほど滞在しているうちに事務員たちと親しくなり、私が帰るという前夜数人の人たちが私のためにささやかな送別会を開いてくれた。だだっぴろい和室の中央に円座をくみ、畳の上にいささかのちそうを並べてビールをくみかわした。酔うほどに、話は佳境に入り自分がなぜ宗教に入ったかを語ってくれる。いずれも青少年期に極道者であったとか、病苦にさいなまれたとかの話なのだが、20年もたった現在なおそれらの話を鮮明におぼえている。さしずめ説話文学の懺悔譚をきくおもいであった。

北信の分校にいた頃、職員旅行で高山、下呂温泉に行った。帰途、私だけ単独行動をとり、高山から富山へ出た。富山県立図書館の志田文庫をみるためである。かつてこの地に疎開した俳文学者志田義秀の所蔵した書籍が、没後県立図書館に入ったのである。芭蕉研究に業績のあった義秀氏であるが、蔵書は意外に広範囲で、私の見たい天明中興期や化政期のものもかなり所蔵されていた。所々興味のひかれた箇所に朱墨で傍線や○印、書き込みがされているには驚いた。この種の特殊文庫は当然のことながらコピーを許可する所は少ないが、富山県立図書館は自由に、しかも大量にとってくれる。江戸時代の版本など見方によっては、コピーをした方がかえって虫がつかないかもしれない。つまらない類題句集まで貴重書扱いにして複写を許さない昨今の風潮も少々考えものだ。その後、何度か手紙でコピーを請求し郵送してもらったが、こういうものわかりのよい図書館が多いと研究者もたすかる。

私の訪れた当時の富山県立図書館は、富山市の郊外に移ったばかりで近くには食堂や旅泊施設がまったくなかった。2、3日滞在したいと思っていた私は大いによわった。富山市内まではかなりな距離である。しかたがないので、最初の夜は館に程近いあやしげなネオンのつく宿（いわゆるラブホテル）に一泊することにした。髪を赤く染めた50がらみの宿の女将に足の先から頭のてっぺんまで、しげしげとながめられてやっと宿泊を許可された。それもまた今となっては懐しい思い出である。

私にはいつもひとり心に描いて楽しんでいるひとつの夢がある。全国の特殊な文庫を訪れ、見たいだけいつまでも滞在して本を見、近在の名所旧蹟を訪れ、夜はその土地のおいしい酒や肴に舌つづみをうつ。一体いつになったら叶う夢か、十余年前に描いたままいまだに実現するメドもないところをみるとまず一生無理なことであろう。　（教授）

疲れと酒が見せてくれた夢の話

関口　信雄

2日前の11月1日、私の主宰する声楽家グループ「イデアーレ」の演奏会が終った。

その夜は、メンバー達と夜明けの4時頃まで酒を飲み、おしゃべりをした。話の内容は全く覚えていない。正にコンサートのフィナーレで歌った歌詞そのもの、『酒の神様はラッララー飲めぬ奴らはつまみ出すのだ……』

演奏会の翌日というのは、いつでも妙に物悲しく、切ない気持になる。長い期間をかけて、頭と体に蓄積したものを、何やら全て放出してしまったようで、いつもメランコリックになる。不思議なものだ。

その夜、正しくは朝だが、ようやく眠りについて夢を見た。それは、子供の頃の音楽との出会い、いわば私のマイルストーン的な数場面だ。面白かった。あれは夢なのか、それとも疲労とアルコールで麻痺した頭の中で、無意識に思い出していたのだろうか。

夢、その①

小学校低学年の私は母や姉と一緒にテレビを観ている。番組は当時大人気のアメリカ映画、『ハイウエイ・パトロール』だ。隣室から父の聞いているレコードが聞こえる。ベートーベンの『田園』だ。父は大のレコードファンで、当時レコードはほとんどアメリカから直輸入していたと思う。『田園』にTVのパトカーのサイレンが交錯した。襖を開けて怒る父。やむなく私が父とつきあうことになる。父と並んで聞きながら、私は何かと曲について質問しだす。

「これが嵐？」「これが鳥の声？」父は嬉しそうに教えてくれる。ソファーに身をしずめ、パイプとブランデーを友に、ベートーベンを楽しむ父を見て、私は無条件に「僕の親父はカッコイイ」と思ったのだ。

父は私が小学校6年生の時に他界した。

夢、その②

もう父が死んだ後のことだ。私は父の使っていた机の中をゴソゴソやっている。父の生前、勝手に開けるとしかられた机だ。ドキドキしながら中を探険していると、一冊のノートがあった。緑色の皮表紙がついた横長の美しいノートだ。ページをめくると、そこには父の愛したシャンソンの歌詞が、フランス語と訳詞で何曲か書かれている。父のお気に入りだった万年筆で書かれたシャンソン……『パリの空の下』『パリ祭』『枯葉』…、私はそのノートから、正しく〝歌〟を感じた、〝音楽〟が聞こえた。父の声で。

夢、その③

私は小学校1年の時に、6才上の姉の影響でピアノを習い始めた。小学校5年まで何とか続いたものの、かなり悪い弟子だったろう。5年生の夏、私の頭の中は野球で一杯だった。レッスンは嫌で嫌でたまらない。野球の練習をあきらめてピアノのレッスンに行くなど、それこそ男の恥だと考えていた位だったから。当然ながら、おけいこに行くと言いつつ野球に行く日が増えはじめ、ついに先生にも知られるはめになった。（そのピアノの先生とは、何と兎東先生の御母上）。先生のお宅に「今日で止めたい」と相談に伺った日、私の心は晴ればれとしていた。遂にピアノと縁が切れるのだ

その日先生は「それほどピアノが嫌いなら、残念だけど今日限りね」とおっしゃって、記念にと白いハンカチーフをプレゼントして下さった。その帰り道、ハンカチーフの入った小さ

な箱を片手に自転車をこぎながら、何やら、とても大切なものを自分から捨てたのかな？　とハッキリ感じたのだった。

夢、その④

中学時代の私はモテた。これは正真正銘モテた。本当にモテた〼　何しろ生徒会長で応援団長を兼任、これだけでも異例だったのだ。生徒総会で演説をしたかといえば、応援練習となると白鉢巻きに竹刀を持って激を飛ばした。

しかし、私がモテたのは、その上ピアノを弾いたからなのだ。あれは確か学年全体で合唱を歌う行事があり、曲は『タンホイザー大行進曲』だったはずだ。指揮と伴奏をオーディションで選ぶという事になり、私はレコードを探した。当時、この一曲というレコードは無く（オペラの全曲盤は高価で、なによりそれは小使いがもったいないとしか思えなかったから）　無理を聞いてくれたレコード屋さんが、学校教材用レコードというのを探し出してくれた。それは今も大事に持っている。それを聞いて私は、これはイイ〼　と直感した。何と素晴らしいものが世の中にはあるのかと思ったのだ。ピアノが下手だからオーディションは指揮をやろうか等と考えて、ある日の放課後、音楽室のピアノでチョコッと練習しているのを何人かの女子学生が見ていたらしい。そして翌日には、ラブレターが下駄箱にどっさり届いていたのだ〼
当然のなりゆきとして、私は「もう一度、音楽をやろう〼」と決心したのだった。（兎東先生、ゴメンナサイ。）

中学から高校にかけて、私はいろいろな学生バンドを組んだ。ジャズバンド、フォークバンド、ハワイアンバンドetc、この時代にクラシック音楽以外の楽しみをかなり知ったと思う。又、自己流で身につけたジャズの基本は、今私の音楽に少なからず影響を及ぼしていると思える。楽しい青春時代だった。

夢、その⑤

私の家の家業が酒造りの為、長男である私は、経済系統の大学へ進学するものと誰もが、いや私自身が思っていた。いよいよ大学受験が目前に迫り、私はやはり東京の私大を2校受験しようと考えた。東京は上野駅前にあった我が家の常宿に部屋をとり、いざ受験と出掛けたがどうにも落ち着かないのだ。これで大学に合格すると私の人生もほぼ決まりかな、という思いが次第に高まっていたのだ。私には就職の心配が無いのだから。造り酒屋の三代目が待っているのだ。結局、私は1週間東京で映画を観て過ごし、2つの大学共ほとんど白紙で答案を出した。今思うと冒険だったと思う。それに代るプランは何も無いのだから。でも音楽をやりたいとは考えていた。クラシックでなくても、バンドマンでも（その方が難しかったかも？）とにかく音楽で生活したいと決心していたのだ。この一週間を送った旅館の天井と部屋の臭いは今でも忘れられない。毎日ゴロゴロしていて、ものすごく罪の意識があったから。

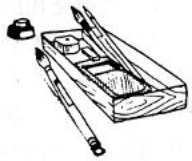
私が音楽大学に合格した顛末を書き始めると紙面が足りないので、これは又後日。

とにかくピアノもろくに弾けず、何の楽器もやらなかった私を救ってくれたのは、応援団で鍛えたノドだったことは確かだ。正直なところ歌を歌って大学へ行けるなら、こりゃ最高〼なんて意識しか無かったのだから。幸か不幸か高校を卒業しているので毎日がフリー。東京と上田での音楽トレーニングと受験準備は、普通の受験生の2～3年分を一年間でこなしたと思う。ピアノも聴音も理論も何もかも。でも楽しかった。受験勉強がこんなに楽しくて良いのかと本気で思う位。やりたい事を選んで本当に良かったと確信した。

夢を見た。ボンヤリする頭の中で、すでに他界して十数年経つ母が昔よく言った言葉が聞こえた。「音楽を選んだ以上、音楽で人様の役に立て、お前の歌が世の中の役に立つまでは一人前の顔はするな」と。

今日あたり仏壇に向って、「そろそろ一人前の顔をしてもいいかな？」と母に聞いてみようかな。

今日から、年内残る4つのコンサートの準備が始まる。　（助教授）



墨の話

周東清芳

硯で墨を磨っていくと独特の香りがしてきますが、あの香りをどう思いますか。書道や墨に余程悪い思い出をもつ人でない限り、大抵の日本人なら〝いい香り〟、〝心を落ちつかせるしっとりとした香り〟と思うのではないでしょうか。が、〝いい香り〟は墨そのものの香りではなく、中に含まれる香料の香りなのです。御存知のように、墨は煤と膠が主な原料ですが、膠の臭いを消すために混入するのが香料です。膠の原料は獣や魚の動物性蛋白質（ゼラチン）ですから、あまりいい匂いはしません。鼻をつまんで墨を磨ったり、息を止めたまま字を書くのは大変ですから、香料を入れて臭いを消さなければならないのです。まあ、お部屋にシャルダンとか、トイレにサワデーとかいったようなものでしょうか。快適な書写活動をするためには必要なものでしょう。

けれども、磨墨のときにこの香料が、稀にではありますが、悪戯をすることがあります。気持ちよく磨っているときに〝ガリッ〟という、砂粒のような異物の感触がして、硯にひと筋ふた筋と傷がついてしまった経験はありませんか。その砂粒のようなものこそ、香料なのです。煤にも膠の溶液にも、今日では異物が混じることはほとんどないそうです。煤と膠の溶液を混ぜて練っていったあと、型入れをする直前の最後の練りの段階で、職人さんの熟練した手でふりかけるようにして香料が混ぜられます。このとき、粉末状の香料が砂粒大に固まったままになってしまうことがあるのだそうです。墨を練って木型に入れる作業をするのに、あまり乾燥していてはいけないようで、部屋の湿気を一瞬吸い込んでしまって固まるのでしょう。

〝必要悪〟ということばがありますが、この香料の固まりの場合は、もともと〝善〟であるものが偶然〝悪〟になったものです。高品質の墨を気持ちよく磨って、よい作品を書いてもらおうとする墨造りの職人さんたちの祈りとは裏腹に、名硯で磨墨しているときの、あのなんとも言えない感触と香りに陶酔境に遊んでいる折も折、あの〝ガリッ〟という音と感触によって、墨を持つ指の関節から肘、腰、膝へと、黒板や曇ガラスの裏面に爪を立てたときに似た感触が走り、鼓膜と顎が手をつないで笑ったようになるのです。無我の境地とか創作意欲とかいったものが吹きとんでしまうばかりでなく、大切な硯の表面に悪魔の爪跡がくっきりと残ってしまうのです。

それほどの結果を生じる危険性を少しでも持つ粉末の香料など使わなければよいでしょうし、動物保護の見地からも麝香など天然の香料を使わなければよいとも思うのですが、科学の相当に発達した今日でも、これに代わるものがなかなか見つからないそうです。素人考えでは、液状の香料を墨に混ぜても乾燥させる段階で香りがとんでしまうとか、膠に悪い影響を及ぼすとかの問題がありそうですし、極度に乾燥させた粉末を使えば墨全体が平均に乾燥せずにヒビ割れのもとになるといった問題もありそうです。

いっそのこと香料の混入をやめたらどうでしょうか。しかし、それには膠の臭いを除去するか、天然の膠に代わりうるものを見つけるかしなければなりません。後者はかなり研究が進んできているようですが、書いたあとの乾燥の具

合とか、筆毫の損耗とかいった点で天然の膠にはかなわないそうです。前者については、これも科学的知識を持ち合わせない私に詳しいことはわかりませんが、膠の臭いの成分と墨にとってプラスに働く成分が別のもので、これらを分離できてしかも働きを損わなければ可能でしょう。が、ほぼ無臭の墨が造られていないことを考えますと、これもまだ研究の過程にあるのでしょう。唐末五代に李氏という墨造りの名人父子が出てから一千年以上の間、多くの造墨家が研究に研究を重ねてもいまだに解決できていない大変な問題なのです。

ちょっと話がそれますが、私の好きな日本酒と墨には共通点があります。墨の原料である煙煤を採るための油の品質とその採り方、これは日本酒の原料となる米の品質と精白歩合に似ています。製造の時期は両者とも寒期ですし、吟醸酒が低温長期発酵させるのと同様、墨もしっかり練ってじっくり乾燥させます。反対に悪い酒はアルコールを沢山入れ糖類も入れ、つけ香という贋の香りをつけるように、劣悪な墨も安物の香料をいい加減に入れてごまかします。ただ違うのは、香りのつき方です。日本酒、中でも吟醸酒という高級酒の香りが発酵の過程で自然に出てくるのに対し、墨の方はいくら練っても叩いても香りは出てきません。香りはつけなければいけませんし、つけないと臭いのです。

ところで、固形墨を手にして気になることがもうひとつあります。形や彫刻がそれで、香りと同様に、楽しませてくれる要素となっているのですが、これにもちょっと気付かない落とし穴があるのです。一般に高級な墨は、その品質を誇るように美しい形（文字や彫刻）が施されています。こういう美しい彫刻が、立体的で複雑であればあるほど、墨そのもののためにも、磨って得られる墨汁のためにもよくないことが起こりうるのです。

固形墨の中の煤の粒子は、硯の表面を墨が通るときに、一緒に固められている親水性をもった膠の粒子とともに水中にとけていきますが、このとき、硯に接していない墨の面の一部も水に浸っています。この部分が次々と磨り下ろされていくのならほとんど問題はないのですが、水に浸ってふやけたままにしておきますと、乾く時にヒビ割れて生じますし、それが砕けて硯の上で圧し潰されますとものすごく大きな粒子が死んだ状態で沈殿し、粗く仕上がりの悪い墨汁になってしまいます。その意味で磨墨後の始末が簡単な墨、つまり表面の凹凸があまりない単純な形のものがよいということになりますが、何の変哲もない積木や羊かんのようなものより、やはり使用後の手間が多少かかっても立体的な装飾の施された墨の方が好まれるようです。

こうして考えてきますと、墨は芳香を持ち美しい形をした方がいいことはいいけれど、その度が過ぎると本来の目的から外れてしまうというところに落ち着くようです。なんだか人間の化粧や服装のことにも似ているように思えます。着任して一年半、本学の学生に墨の姿を投影してみますと、思い当たる節が浮かんできます。論語の学而篇に「賢を賢として色に易え……」ということばも見えます。学生の本分を第一に据えて欲しいものです。　（講師）

「本」のすすめ

―― 私の読書 ――

荻　原　和　夫

私は本来趣味といわれるものを何も持ち合せていないのであるが、他人から趣味はと聞かれると月並みに「読書」ということにしている。実態は「積ん読」だけ、「買い込ん読」だけで、いつか暇が出来たら読むこともあろうかと、せっせと買い込んでいるにすぎない。恐らく一生読まずに終るものもかなり出るであろう。その結果、兎小屋にもならないほどの狭い我が家の中に、ところかまわず本類が積まれつつある。但し、高価なものはなく、冊数だけが増えているだけである。将来といっても、そんなに先が長いわけではないので実現するかどうかはわからないが、夢としては古本屋でも開くか、ささやかなミニ図書館にでも出来たらと考えている。ただ私の蔵書類は前述の如く私の乏しいふところ具合と、私の独断的興味とで選んでいるので、他人からみて価値のありそうなものは殆んどない上に、ベストセラーものも殆んどないので、他の人々には役立つものは無いかも知れない。著者には申し訳けない言い方になってしまうが、売れば一キロ当りでチリ紙一枚にもなるかどうかのものばかりである。その様な本であっても私には貴重品であり、興味のつきないものばかりである。また、どんな本でも著者のご苦労を思うと、粗末には出来ない。したがって本だけは手離せない。ましてやチリ紙交換なんかにはとても出せないし、売ることすら出来ないでいるのでたまる一方になるのである。実は本ばかりでなく雑誌、週刊誌、果ては商品カタログや冊子のたぐいまで、印刷物で何がしかの参考になるようなことがちょっとでも書いてあるものは、とにかく捨てられない。ほんとは新聞も同様であるが、こればかりは涙を飲んでチリ紙交換に出している。ただし大事な記事のものは残してあり、それがけっこうたまって来ているし、切り抜きもかなりの量になっている。このように私の趣味はほんとのところは単なる貧乏性の紙屑蒐集かも知れない。

それと私の楽しみのもう一つは本屋巡りである。とにかく暇があれば上田市内や長野市内の本屋を巡り歩いているし、上京したときにもかならず本屋を何軒か廻り、お土産は本ということにしている。本屋に行くだけの目的で上京することもしばしばである。本は重いので、以前は持って帰るのが大変であった。行きは空のカバンか袋をもってゆき、帰りには本を一杯つめて帰るのである。この頃は宅急便が普及したので、それで送るようにしているので、その点は楽になった。東京駅近くでは八重洲ブックセンター丸善、神田神保町では三省堂、書泉など、渋谷では大盛堂、新宿では紀伊国屋にはたいてい寄るし、時間のある時は神保町の古本屋を何軒も廻って歩く、そして池袋では西武デパート、東武デパートの書籍売場は規模が大きく、本の種類も多いので寄るようにしている。何故そんなに廻るのかと笑われそうであるが、その理由の一つは、本屋巡りが楽しいこともあるが、私の買いたいような本はベストセラーものではないので、新刊は見つけたときに買わないとすぐ店から姿を消してしまい廃版になってしまうことと、出版社によって販売系列があるらしくて、店によっておいてある出版社が違うから、一個所の本屋では全てが見られなかったり、見落しが出てしまう危れがあるからである。そうかといって本はカタログだけで判断するのは心もとない。やっぱり実物で内容を確めてからでない

と買えない。それと昨今は出版物の洪水状態にあり、その全てを購入したり、読んだりすることは不可能である。視点を定めて厳選しなければならない。私のばあい結局専門に関する学術書とそれに関連する分野のものが大部分を占めている。ほかに紀行もの、歴史もの、民俗学に関するものなどに絞っている。今はコピーも出来るので必要個所が数頁程度迄のものは申し訳けないが個人的にはコピーで済すこともあるが、以前はたとえ一行でも、一頁でも必要な個所のあるものは可能なかぎり購入して来た。こう書いてくると、いかにも蔵書が多いように聞えるが、私のばあいなどはささやかな方である。世の中には同様な病気にかかっている人はけっこう多く、先生なんて呼ばれている人は大抵そうであるらしい。なかには高価な本を次々と買い込んで、生活苦に陥ったり、借金におわれたりしている人も居ると聞く。このように本には一度買い出したら止められなくなる麻薬的なところがあるようだ。その魅力は何んなのであろうか。人によって原因は違うかも知れないが、何か不思議な魔性をもっていることだけは確かである。本に囲まれていると何んとなく安らぎがあるのである。私にとってもう一つの本の効用は睡眠薬代りということであろう。私は寝る時にはかならず枕もとに2～3冊の本を置いて蒲団に入る。どんなに眠りにくい夜でも、どれか2～3頁読むうちに大抵眠ってしまう。時にどうかしてどうにも眠れない日があるが、そういう時こそ読書のチャンスである。無理に眠ろうとせず本を読むことにしている。それが私にとってもっとも充実した読書の時間となっている。このように私にとって本は読んでも、積んでも、そしてさがして歩くのも楽しみになっている。しかし、本は重い上に場所もとり、更には維持管理もけっこう面倒であり、自分にとって貴重であっても、家族などには興味のない本、不要の本は文字通り重荷であり、邪魔もの以外の何ものでもないようだ。古本屋などで時々同じ蔵書印が押された本が山積みになっているのにおめにかかることがあるが、これなどは残された家族が始末に困って売ったものであろう。ところで古本屋には「高価買います」なんて看板が出ているが私の見聞した限りでは蔵書を売りに出したときに古本屋が高く買い上げてくれることなどめったにないようである。買ったときの苦労を思うと情なくまた気の毒な感じがする。私もこれからは本を買い込むばかりでなく、むしろいかに蔵書を整理し、減らしてゆくかが一番必要なことであるかも知れない。東大名誉教授の竹内均先生は、本は読み終ったら、必要な内容のものは原稿用紙三枚以内に要約したものを残し、本そのものは処分してしまうとのことである。そして自宅に本を「積ん読」のはやめて図書館を大いに活用することをすすめている。そうすれば家を狭くすることもなく、また本を購入するお金も助かり経済的であるとのことである。私は今のところ手持ちの本を手離したり、処分したりする気はないが、いずれにしても個人の蔵書数などどう頑張っても知れたものである。

本の有効利用には、やはり図書館を大いに活用することがよい方法と思われる。

竹内先生はまた蔵書をみられることは裸を見られるような感じがしてイヤであるとのことである。その点についても私も似たような感じをもつ。どんな本を読んでいるかによって、その人の品性や知的レベルが赤裸々になると云われるからである。

最後に読書に関する金言の幾つかを記して、読書のすすめにかえる。

- 書籍なき家は主なき家のごとし。（キセロ）
- 良き書物を読むことは、すぐれた人々と会話をかわすのに等しい。（デカルト）
- 読書は知的情報を手に入れる上で、最も基礎的でかつ最も有効な方法である。（竹内均）
- 書籍は読まなくては木片と同じである。
- 書を読めば君子は知性を備え、富者は品性を備え、愚者は賢者となり、万人みな利あり。（王荆公）
- 読書ほど、安価にして永続的な快楽はない。（モンターギュー）

（講師）

オーストラリア芸術鑑賞旅行

幼児教育科　2年　大　塚　あゆみ

みなさんは、この夏休みをどんな風に過ごしましたか。私は、学生生活最後の夏休みに、今までにない経験をすることができました。

それは、オーストラリアに行ったことです。それも、レジャーで行ったのではなく、芸術鑑賞旅行として、学校を訪問し、教育を見るというとても充実した旅行でした。そのきっかけを与えて下さった、北村恵子先生には、とても感謝しています。先生が4月の講義の時に誘って下さらなければ、こんな良い経験はできなかったと思います。

そのオーストラリアでの旅行をみなさんに報告しようと思います。

メンバーは、東京学芸大学の先生でこの旅行を計画して下さった小林志郎先生を初めとする諸先生方19名と、日本舞踊を紹介するために参加された吾妻寛穂さんと一葉さん、そして、東京学芸大学の学生2名と本学学生の7名、合計30人が参加しました。

8月15日の夜、日本をたって私達はメルボルンへ向いました。9時間も座りっぱなしで、座り疲れはするし、飛行機のゴォーというものすごく大きなエンジン音がずっとしているので、熟睡なんてとんでもないことでした。でも、飛行機の中から見た真赤な朝焼けは、とても素敵で、おもわず溜息がこぼれました。それからこれは、帰ってくる日に見たのですが、飛行機の窓からも虹が見えるんです。私としては、一寸した発見かなぁと思っています。

オーストラリアは春で、桜やデイジーの花が咲いていました。
しかし、朝と夜の冷え込みが激しく、コートを着ないと外を歩けませんでした。

私達学生9名は、ロンセストンとホバートでの3日間ホームステイをしました。英語が苦手なので初めはパニック状態でしたが、身ぶり手ぶりや、片言の英語で通じるもので、お互いの家族のことや学校のことなど、話に花が咲いてしまえば、その流れでいくらでも話せるものでした。そのため夕食の時間も7時頃から2時間位いかかりましたが、とても楽しいひとときでした。

学校訪問は、小学校から大学、障害者の学校へ行きました。

大学では、ワークショップも計画されていて、それは、外に出て聞こえた音を楽器で表現するといったものでした。初歩的なことのようですが難かしかったように思います。
こんな授業だから感性豊かになるのかなぁ　と思いました。

オーストラリアの学校は、1クラス25人以下という理想的な人数で、一緒に参加した先生方が、とてもうらやましがっていました。そのためか授業中の私語がなく、子供達の集中力には驚きました。

とにかく日本の教育方法とは違っていました。受ける側がのびのびとしている、ということはとても理想的だと思いました。

また、精神薄弱者と高校生が組んで授業を受けていましたが、障害者全体の70%の人は普通学校へ通っているそうです。その点から見ても障害者の受け入れられ方の違いが見えてくるように思いました。

日本以外の教育方法を見ることができ、本当によかったと思います。この旅行によって、私の世界が少し広がったように思います。

秋の日のこと

国文科　2年　臼田敦美

先日、迷い子になりました。

この年になって、と呆れる方もいらっしゃることでしょう。実際のところ、友人達には大笑いされてしまいましたし、本人も、我事ながら呆れています。しかし、この事態に関する自分の責任を棚に上げて、敢えて言い訳をするならば、原因は空です。私が迷い子になった責任は秋晴れの空にあります。

さて、駅まで、徒歩で十五分程度の道のりを私は毎朝、散歩気分で周囲の景色を楽しみながら、三十分位かけて歩きます。現在、私の住んでいる所は家の目の前に山があり、周辺にあるのは田んぼや畑ばかりで、とても自然に恵まれています。小さい頃から、比較的「都会」といわれる所で育ってきた私にとって、現在の様な自然に囲まれた環境は、憧れそのものでした。

しかし、良い事ばかりではありません。自然たちはしばしば、天気の良い日には特に、様々な手段で私を誘惑するのです。心地良い風や、青い空に誘われて、そのままハイキングへ行ってしまいたい衝動と戦いながら、それでも私は学校を目指さねばなりません。

さて、私が迷い子になった日も、朝からとても天気の良い日でした。私は、良い天気を楽しもうと、少し早めに家を出ることにしました。澄んだ空気の中を上気嫌で歩いていると、吹く風がいつの間にか冷たさを帯び、見まわせば、世間はすっかり秋の気配です。田んぼの稲は刈り取られ、空気は少し冷たくなり、そして、何よりも変わったのは空でした。見上げた瞬間、足が止まってしまい、私はしみじみと〝秋〟を実感したのでした。

引き込まれそうな空。澄みきった真っ青な色がどこまでも広がり、果ての無い程高い空は、「天高く――」の言葉の様に、「空」とでは無く、「天」と呼ぶにふさわしい、壮大な印象を私に受けさせました。そして、それはまぎれも無く、秋の空だったのでした。

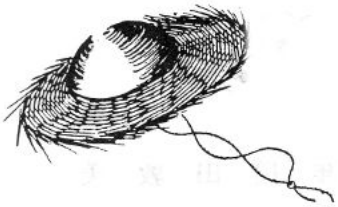
秋を実感したとたん、私は急に侮しくなりました。二年生に進級したこの春から、妙に忙しく、せっかく自然に恵まれた環境にありながら一度もしみじみと季節を実感したことが無かった事に気付いたのです。特に、夏は、就職活動と卒業研究に追われるうちに、気が付くと夏休みが終わってしまい、夏が終わってしまったことにも、秋がやって来たことにも気付かなかったのです。そして、過ぎて行った季節に、置き去りにされた様な気がしました。

こんな気分で、もう一度空を見上げると、このまま駅へ向かってしまうのは、何とも名残りおしい気分だったので、いつもの道を少しそれて、駅まで遠まわりすることにしました。極上の空の下を、見慣れない景色を楽しみながら歩く気分は最高で、どんどん道をそれて行くうちに、とうとう自分が何処にいるのか、分からなくなってしまいました。こうして、私は、数年振りに迷い子となったのです。

迷い子になったことが分かった時、しばらくは呆然としてその場に立ちつくすだけでしたがやがて開き直ってあたりを見まわすと、秋の風景が、実に印象的な美しさでした。

やがて、何とか道を見つけ出し、駅に戻った頃には、学校へは遅刻寸前という時間でしたが、それにも増して、先刻の風景は、私の心の中を占め、楽しい気持ちになったのです。

二十歳を過ぎてからの迷い子、というのも、たまにだったらいいかも知れないと言ったら、また、友人達に笑われてしまいそうですが。



幼　稚　園

幼児教育科　1年　山　田　恵　子

幼稚園の頃、私は、お昼寝が嫌いでした。お昼寝が嫌いというよりも、静かにしているのが嫌いだったのです。眠れなくて、薄目を開けている事が多く、「なぜ、みんな眠れるのかなあ。」と、不思議に思っていました。

お昼寝には、思い出があります。年中の夏の事です。向き合って寝ていた友達と、こそこそと話をしていた所、先生にみつかり、叱られてしまいました。先生が近づいてきたので、話をやめて、寝たふりをしたのですが、すでに遅く、私の寝ている布団を乱暴に引っぱり上げたのです。私はその勢いで、床の上にごろんと落ちてしまいました。当時、お昼寝のできない子は、みんなから離れた、廊下のはじや、お寺の暗い本堂で寝かされていたのです。その事を知っていた私は、『ちゃんと寝るから、ごめんなさい』と、何度も、何度も、泣きながら訴えましたが、先生の顔は鬼のようで、許してはもらえませんでした。結局、泣いたのも報われずに、私は暗い本堂の床に寝かされました。とても暗く、お釈伽様の台の所にくもの巣があったのを、今でも鮮明に覚えています。

幼稚園の思い出はたくさんありますが、このことは、私にとって今だに印象深く、忘れられないものとなっています。そんな体験をもとに、お昼寝が好きになっお話を作ってみました。

お昼寝なんか嫌いだもん

ひろし君は〝おひさま幼稚園〟の、さくら組の年中さんです。ひろし君はお昼寝が大嫌い。けいこ先生が「お昼寝ですよう。」と呼んでも、お外で遊んでいます。けいこ先生が「ひろし君ノ。」と呼んでも、ひろし君は「やーだよ、遊んでいるノ。」ひろし君を連れていこうとしても、すべり台から離れません。けいこ先生は恐ってしまいました。それでも、ひろし君はお外で遊んでいます。

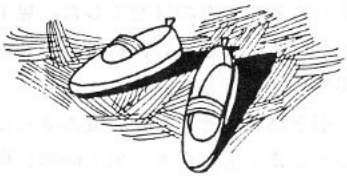
ひろし君は、風船のようにふわふわとお空に上り、〝お空の国〟に行きました。雲のすべり台、雲のぶらんこ、ふわふわの甘い、甘い綿あめ、楽しいことばかりです。走って転んでも痛くありません。ひろし君は飛び回っていました。

その時です。ひろし君は穴に落ちてしまいました。「わー助けてえ。」

いつのまにか、ひろし君は眠ってしまい、夢を見ていたのです。ひろし君は〝お空の国〟が大好きになりました。それからひろし君は「僕〝お空の国〟に行くんだっ。」と言って、お昼寝をするようになりました。

ほらネ、ここに出てくるひろし君は、私のいとこです。〝お空の国〟は、私が行ってみたい夢の国です。幼稚園の思い出と夢とを、合わせてみました。

私にとって、幼稚園の頃の思い出は大切なものとなっています。これからも、多くの子供達と接し、多くの絵本を読んで、大人になっても子供の心を忘れずに持ち続けたいと思います。



童話の世界から

国文科　1年　佐藤　陽子

教室の窓から、幼稚園の園児たちが校舎の裏の小高い丘にかけのぼってくるのがみえた。草にとまっていたとんぼが一斉に飛び立つ様子を子供たちはまたおもしろそうにみつめている。あぶなげに歩く子がいたり、かぶっていた帽子でとんぼをつかまえようとする子がいたり、秋晴れの穏やかな昼下りはじつに楽し気である。自分にもあの子たちのような頃があったのかと思うと、今さらながらおかしく、不思議にさえ感じる。その頃の記憶は曖昧で確かではないけれど、どんなことをして遊んでいたかは、かすかに覚えている。そして、シンデレラ、人魚姫桃太郎といった童話や昔話を多く聞かされたり、読んだりしたのもこの頃だったと思う。

絵本を開くと、実際に自分が見ているかのように、さまざまな色を使った世界が広がる。簡単な文章表現と絵とが一致して、すんなりと頭の中に場面が浮かぶから、楽しく読めるのだと思う。だんだん、絵に代って、文章で細かい描写がなされた本も読むようになってくる。文から自分なりのイメージをふくらませることを覚え始める。

そんな時読んだ本の中では、『ナルニア国物語』のシリーズが大好きで繰り返し読んだのを覚えている。金色のライオンーアスランが支配するナルニアに入りこんだ子供たちが、冒険したり、魔女と戦ったりする話をどきどきしながら読んだ。預けられることになった屋敷を探険していた最中に、大きな衣装だんすの扉を開けてみたルーシィが、中の毛皮をよけ奥へ手をのばすと、あるはずの板はなく、雪の降る見知らぬ風景が広がっていた。　この物語の始まりの部分が印象深くて、ありえないと思いながらも、〝もしかして自分の家のタンスを開けたら〟と思ったものだ。ピーターパンを読んだときは、あんなふうに自由に空を飛べたらいいだろうなと感じたし、ネバーランドは必ず存在すると信じていたような気がする。

おとぎ話や童話には、心をあたたかくする要素がたくさんつまっている。〝現実にはそんなことはないよ〟と否定しながらも、どこかで求め続けてしまうもの、形がないだけに不確かだけれど信じたいと思うもの、そんな何かがそれらには含まれている。

童話や昔話から夢や憧れをいっぱい食べた子供たちは、社会にでていくことになっていろいろなことを見て知っていきながら、それらを消化していく。そのうちおなかがへってきても、一度夢や憧れのおいしさを知っているから、また無意識のうちに食べたいと思う。ただ与えられたものを受け入れていくのではなく、今度は自分自身で夢をつくりあげよう、実現しようと思い始める。それができるだけの力や知識は自分でも気がつかないうちに、誰もが持っているのではないだろうか。

もし、子供たちから、童話といった類のものがなくなってしまったらどうなるだろう。最近『みにくいアヒルの子』や『トム・ソーヤの冒険』など、何らかの問題を含んでいるために、子供たちに読ませるのは適当ではないのではないか、という話を耳にする。言われてみればそうかもしれないが、こうして取り上げられなければ、それですんでしまうようなことにも思われる。子供たちの読む物語の世界は現実と関わりながら、けれどあくまでもかけ離れたところに存在するものではないかと思う。子供に夢をみせる手助けをする童話がなくなってしまえば子供に目かくしをして社会に放り出すようなことと同じことになりかねない。

児童文化研究大会に参加して

幼児教育科　2年　深　沢　あゆみ

10月14日の研究大会は、前半は後藤田純生先の講演、後半は3ケ所の会場に分かれて分科会でした。

後藤田先生は、30余年、NHKのラジオやテレビの子ども向け音楽番組の製作を手がけた方で、昭和の歴史を語るに等しい話を沢山話して頂きました。中でも、テープに録音されていたスウェーデンの幼稚園の子ども達の『あそびの歌』は、本当に楽しそうなので、場所は違っても子どもの無邪気さは変わらないのだなあと嬉しくなりました。ピンポンパン体操は大好きでしたし、げんこつ山のたぬさん、かぼちゃの種をまきました。などは、私達の世代ほとんどの人が遊びながら歌った曲だと思います。懐かしい曲が続々と出ました。その場での手遊び「Satu. Duwa Tiga」は、気ばかり焦ってその割には手が思うように動かず、大騒ぎして楽しんでしまいました。

3時過ぎからの分科会、私は第2の「子どもと共感しあい保育をとらえなおす」の発表を聴きました。松本市の宮島先生と川上村の近藤先生は、両先生共、気さくでとても感じが良く、人間的に温かみのある方々だと、つくづく感じました。

口頭詩という言葉は、聞いた事があるのですが、ピンとくるものがありませんでした。しかし、子どもの何気ない言葉、仕種、表情を私達保育者又は母親がキャッチし、記録に残す事によって出来上がるのです。近藤先生は、子ども達との触れ合いで、自分の保育する姿勢を反省させられます。特に印象に残ったのは、先生が言葉を記録するようになった動機ともいえる、ともこちゃんとの触れ合いです。ともこちゃんが、可愛い菊の花を先生に見せようと、ひたすら先生を呼びます。

「こんどうせんせい、はな。」先生は背中を向けているせいか、鼻をかみたいのだと勘違いします。ともこちゃんは、後ろから先生を見て、どんな気持ちだったろうと思います。

今回の分科会は、時間を気にさせない、楽しい雰囲気だけが残りました。来年は、卒業生として、社会人一年生として是非出席したいと思います。

本学の先生方の近刊書

姨捨山の文学

矢羽勝幸　著

信毎　1988　4800円

御存知矢羽先生の姨捨文学研究の一書。

―歌枕がやがて俳枕に発展した実態を解明した研究は管見の及ぶ所多くはない。中世から現代に至るすべての資料、文献を渉猟し、綿密に実地調査を行い、歌枕をめぐる地元の風雅や来訪の雅客の全容を示したのは矢羽さんの姨捨山研究を以て嚆矢とするのではあるまいか ――

（目崎徳衛氏序文抜粋）

谷　神（こくしん）

北川原平造　著

不識書院　1989　2500円

先生の第2作品集、昭和60年後半から63年にわたって作歌された200 余首の短歌集

【図書館ガイド】

※ 図書館ミニ知識 ※

バーコードとは何か

今年、本学図書館にはコンピュータが導入され、機械化作業が始まっています。夏休みには、司書課程一年生にバーコードを貼る実習をしてもらいました。そこで、〝バーコード〟とは何かについて簡単に説明します。

バーコードは今どこでも目につくようになり、スーパー、コンビニエンス、VTレンタル店等白と黒のシマシマ模様のついたものがあふれんばかりです。何故こんなに急激に普及したのでしょうか。

それは、バーコードによる入力（読みとり）がキーボードや、音声はもちろん手入力と比較して、スキャナーでなぞるだけで一瞬のうちに情報が読みとれてしまうということにあるからです。このスキャナーで読みとる方式は、POSシステムと呼ばれ、商店等ではバーコードをなぞるとただちにコンピュータに売上が処理されて、「販売時点情報管理システム」と訳され、流通に大きな力を発揮しているのです。

さてこのバーコードですが、黒と白のバーそれぞれ2本ずつでひとつの数字が表されていて、スキャナーでバーコードに光線を当てると黒と白のバーの幅（モジュールと呼ぶ）に当って反射されてきた光を電気信号に変えることによって数字を導き出すという原理になっているのです。そして、数字そのものを読みとるOCRシステムと違い、バーコードは、拡大縮少も可能なことから消ゴムのような小さな商品から洗剤のような大きなものにも自由自在に対応してバーコード化出来ることがこのような急激な普及につながっているのです。

このような便利な情報処理システムを本学図書館でも採用しました。皆さんが、現在行っている各自の図書貸出票による貸出返却も、このシステムに変ると、貸出カードがバーコード式のもの（学生証と併用を計画中）になり、本のバーコードと両方をスキャナーでなぞるだけで、簡単に貸出返却手続が完了してしまいます。

又、今まで何日もかかっていた蔵書点検もバーコードをなぞるだけで済んでしまいます。時間的にも、労力的にも何十倍もの能率化がはかられるわけです。

そこで今、我々2名の司書は、そのために蔵書データの入力に全力をあげて毎日コンピュータと対時しているのです。一日も早く皆さんに便利な貸出方法を実現してあげたいと努力しています。御協力下さい。

それまでは、現在の手続方法を守って下さい。くれぐれもバーコードをはがす？　なんて人のいないことを祈ります。　（長張）

本年度受入の視聴覚資料

〔ビデオ〕

	主演
•ゴッドファーザーⅠ・Ⅱ	アル・パチーノ
•スパルタカス	カール・ダグラス
•レイダース	ハリソン・フォード
•ジョーズ	ロイ・シャイダー
•フラッシュ・ダンス	ジェニファー・ビールス
•バックトゥザ・フューチャー	マイケル・J・フォックス
•ローマの休日	オードリー・ヘップバーン
•愛と青春の旅だち	リチャード・ギア
•ティファニーで朝食を	オードリー・ヘップバーン

〔CD〕

- 東京ディズニーランド
- ソナチネアルバムⅠ・Ⅱ
- 宗教合唱名曲集
- バッハオルガン名曲集
- Still
- 僕の中の少年（山下達郎）　他

〔カセットテープ〕

- シリーズ「被爆を語る」全14巻
- 赤い鳥名作集　全5巻

〔LD〕

- 世界民族音楽大系 第1期　全16巻

平成元年度学生図書委員会

幼児教育科　2年A組　・片山　千津
　　・生玉　　光
　　B組　・小林ゆりえ
　　・瀬在　徳子
　　C組　・中島　茂子
　　・中島八重子
　　D組　・柳沢　敬子
　　・翠川　朝子
　　1年A組　・小野　聡子
　　・小林美枝子
　　B組　・春原　久子
　　・高島　香織

幼児教育科　1年C組　・中沢美紀子
　　・平野佳奈子
　　D組　・山岸みち江
　　・山田　恵子
国　文　科　2年A組　・勝俣　純子
　　・関谷　智香
　　B組　・室賀　和子
　　・水上　芳美
　　1年A組　・伊藤　博子
　　・加藤　恵利
　　B組　・宮坂久美子
　　・鈴木　文代

編　集　後　記

大きな変動とくに情報と自由を求めてやまない世界の情勢の中で、図書館のコンピュータ活用の波はわが図書館にも及び着々と進行中である。その導入はただ図書館業務の機械化・合理化や図書館の情報検索機能の増強などにとどまらない点は周知の通りである。

情報化社会を生きぬく社会人の基礎的能力として読み書き計算の上に、コンピュータ利用能力の育成が不可欠な点に思いを致したい。

かくして平成元年も多忙の中に暮れようとしている。このとき諸先生方の玉稿及び学生諸君の寄稿を得て図書館便り第16号を見ることができた。当館発展のために今後とも御協力をお願いしたい。　（清水）

（似顔絵カット　国文科2年　山本ゆかりさん）

上田女子短期大学　図書館だより　第16号　1989.12 発行

編　集　上田女子短期大学図書委員会
発　行　上田女子短期大学附属図書館
〒386－12　長野県上田市下之郷620
（TEL　0268－38－2352）